

魔界都市ブルース

菊地秀行

長編超伝奇小説

夜叉姫伝 6

やしき



NON NOVEL





NON NOVEL

「ノン・ノベル」創刊にあたって

「ノン・ブック」が生まれてから二年一月、ここに姉妹シリーズ「ノン・ノベル」を世に問います。

「ノン・ブック」は既成の価値に「否定」を發し、人間の明日をささえる新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。

「ノン・ノベル」もまた、小説を通して、新しい価値を探っていききたい。小説の「おもしろさ」とは、世の動きにつれてつねに変化し、新しく発見されていくものだと思います。

わが「ノン・ノベル」は、この新しい「おもしろさ」発見の営みに全力を傾けます。ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL—351

魔界都市ブルース ^{やしやき}夜叉姫伝 6

平成3年4月30日

初版第1刷発行

著者	菊地秀行
発行者	伊賀弘三良
発行所	祥伝社
	〒101 東京都千代田区神田神保町 3-6-5 九段尚学ビル
	☎ 03 (3265) 2081 (営業)
	☎ 03 (3265) 2080 (編集)
印刷	萩原印刷
製本	明泉堂

万一、落丁・乱丁がありました場合は、おとりかえします。Printed in Japan.

ISBN4-396-20351-9 C0293

©Hideyuki Kikuchi, 1991

長編超伝奇小説
魔界都市ブルース

菊地秀行
夜叉姫伝6



NON NOVEL

祥伝社

目次

第一章 绪论
第一节 概述
第二节 研究的意义
第三节 研究的方法
第四节 研究的范围
第五节 研究的重点

第二章 理论分析
第一节 理论依据
第二节 理论模型
第三节 理论推导
第四节 理论验证

第三章 实证研究
第一节 数据收集
第二节 模型估计
第三节 结果分析
第四节 稳健性检验

第四章 政策建议
第一节 政策背景
第二节 政策目标
第三节 政策工具
第四节 政策效果

第五章 结论与展望
第一节 研究结论
第二节 研究不足
第三节 未来展望

参考文献
附录
致谢

1章 プラハよりの旅客

9

2章 夢見人

39

3章 妖姫ようき哀艶あいえん賦ふ

59

4章 殺戮さつりく暑夜

85



5章 将軍たちの夜

6章 十文字火昇天
じゅうじまんじ

7章 降天の雷火

あとがき

115

141

181

214

カバー&本文イラスト・末弥 純
カバー構成・EE 大林真理子

〈物語に登場する主な人物〉

秋 せつら……………〈魔界都市〉で、せんべい屋兼人捜しセンターを営む美麗の魔人。千

分の一ミクロンの妖糸を操る。

メフィスト……………死人をも甦らせる、恐るべき美貌の魔界医師。

美 姫……………安住の地を求め、四千年の時空をさまよう中国の吸血美姫。

騏 鬼 翁……………姫に仕え、〈新宿〉制覇の野望を抱く奇怪な老妖術師。

劉 貴……………妖琴「静夜」を爪弾き、姫に従う吸血鬼。魔気功を駆使する。

秀 蘭……………姫に付き従い吸血人形を操る妖女。劉貴に想いを寄せていたが、人形娘

に斃される。

ベイ 将軍……………敵の武器を操ることができ、不死身の金髪碧眼の吸血鬼。

華南 高子……………中国古代史専攻の女子大生。夏の姫妃に憑かれ、事件に巻き込まれる。

夜 香……………〈魔界都市〉の戸山住宅を棲家とする吸血鬼で、姫に斃された「長老

の孫。

ガレーンブルク……………〈魔界都市〉の魔法街に住むチェコの魔道士。大鴉を従えている。

人形娘……………ヌーレンブルクに仕え、魔力を駆使する。

梶 原……………異常事態収拾に奔走する〈魔界都市・新宿〉の区長。

「夜叉姫伝1〜5」のあらすじ

〈新宿〉制覇の野望を抱く四人の吸血鬼群が、四千年の時空を超え、〈魔界都市〉に出現した。"姫"、騏鬼翁、劉貴、秀蘭の四人に対し、せつらを始めとし、ヌーレンブルク、戸山住宅の吸血鬼一族の"長老"たちが反撃を企てるが、ことごとく破れ、せつらを介護中の高子は"姫"の毒牙にかかり吸血鬼と化した。

彼らの陰謀阻止の切札せつらは、秀蘭の毒牙を受けるが、秀蘭は人形娘によって斃され、せつらも人形娘の看護で回復した。だが、せつらの息の根を止めるべく、"姫"はベイ將軍を繰り出し、夜香は"姫"の下僕と化し、メフィストは自ら吸血鬼の仲間となった。

やがて〈新宿〉は、吸血鬼殲滅のため陸自特務班の介入を招き、三つ巴の魔戦へ……。

せつらは高子を救うべく、敵の本拠地中央公園へ乗り込むが、現実と虚無が交錯する悪夢の夢に捉われ、隠れ家の迷宮をさまよいつつながら、反撃を試みるのだった。

一方、吸血鬼群では、結末に亀裂が生じていた。"姫"はせつらを下僕とすることのみ執着し、劉貴はその許を去った。騏鬼翁は〈新宿〉支配のため独自の謀略を進めていた。そして、ベイ將軍は高子を手に入れるため陸自特務班と組み、"姫"と激突するが、都庁を火の海と化した死闘の末、敗走した。

孤立無援のせつらを救援すべく、ヌーレンブルクは敵陣へ向かうが、そこにはベイ將軍が立ちただかり、日本政府は、合衆国の協力を得て核による〈新宿〉殲滅作戦を画策するに至っていた……。

1章 プラハよりの旅客

吸血鬼と化した市民の中には、武器の売買業者がいたのかもしれない。

ヘリの尾翼を直撃したのは、明らかに携帯用ロケット・ランチャーから放たれた一発であった。

「操縦不能！——着陸します！」

パイロットの絶叫を、梶原はひどく遠いものに聴いた。

すでに下降に移っていたのは、こうなるとむしろ幸運といえた。

機体のスピンは一回きりで、ヘリはほぼ垂直に——
○メートル下の路上へ落下した。

車輪の接触と同時に、内蔵された点火装置が、百分の一秒の速度で、底部の逆推進ロケットを噴出させる。

激突の衝撃を緩和させる衝撃は、乗員たちの足か

ら頭へと抜けた。

「銃は役に立たんぞ。ナイフを使え。心臓を刺すのだ！」

梶原の指示をどう捉えたか、ひとりがよろめきながらドアに近づき、開いた。

吹き込む夜風は血臭を含んでいた。

「あの女性を助ける。戸塚署へ応援を頼め！」

「了解！」

五つの人影が、九八式自動小銃と散弾銃片手に路上へ散らばった。

小走りに、七、八メートル先の人垣へ突進する。

駅前の交差点であった。人垣の向こうには「BIG BOX」の輪郭が黒々とそびえている。月は皓と中天にあった。

先に人垣を脱けていた数個の人影が、獣の唸り上げて飛びかかって来るのを、フットワークでかわし、銃床で張り倒し、五人はたちまち絶望の美女を囲む吸血鬼の群れへ接近した。

いつせいにこちらを向いた。

平凡な顔と服装であった。昼間見れば、都会の雑踏と人混みに溶け込んで、誰の注意も引かない人々。スーツケースを提げた愛想のいいセールスマン、スーパリーの袋を運ぶ主婦、詰襟の学生、坊主頭にジャンパー姿の暴力団員たち——それがいま、牙を剥いて警備員たちに飛びかかった。

「射て！」

隊長が絶叫した。声に自動小銃の発射音が重なる。

着弾の衝撃で、女がひとり尻餅をつき、何人かが後退した。

腹に響く轟きを食らって二人が吹っ飛ぶ。散弾の猛打であった。その空隙へ五人は飛び込み、貸ビルの前に退避していた女性に駆け寄った。

隊員たちは茫然となった。

花を散らしたピンクのリボンや、虹色のショールや膨れ上がった赤いフレア・スカートといった趣味

の悪さにはではない。百年近く前のヨーロッパを再現した古風なデザインにでもない。それをまとう女の言語に絶する肥満ぶりと、根性の悪そうな容貌に仰天したのである。

「何見てるのよ？」

と、分厚い唇がぶうたれた。

「救援に来ました。こっちへ」

われに返った隊長が手を取って、駅の方へ引いたが、動いたのは手だけである。

「どこ、連れてくのさ？」

「駅の構内だ。——早く」

「やだね、面倒臭い」

隊長は目を剥いた。

栗毛と青緑の瞳——この外国のでぶには、自分を取り囲む状況が呑み込めないのか？

「隊長！」

と、女のスーツケースを手にした隊員が叫んだ。

「このケース、重くて持てません！」

「馬鹿もの！」

舌打ちして、その把手とってを握にぎんだ。力を入れて唸うなった。まるで石の塊かたまりだ。びくりとも動かない。この女——何者か!?

散弾銃が吠ほえた。

五人は二重三重の人垣に取り囲まれていた。背後はビルの壁と合金製のシャッター。牙を剝いた人獣たちは、刻々と迫って来る。

いま、吹っ飛ばされた奴が、のこのこと起き上がって来る。半分欠けた顔が白痴の笑えみを浮かべ、片眼が爛うらん々と光り出した。いつの間にか数も増えている。

隊長は胸の小型手榴弾トへ手をかけた。

いくら悪鬼とはいえ、三千度の炎で焼き尽くすのは気がとがめた。しかし、打つ手は他にない。

「退まがれ！」

叫んで一発をフックからむしり取ったとき、白く膨れた手がそれを押さえた。

「およし。——吸血鬼のごときに、オタオタするんじゃないよ」

言うなり、隊長の反論も許さず、スニーカーが上がった。

空からっぽのように見えた。

躍おどりかかった影が、顎のあたりに重い音をまとりつかせつつ、吹っ飛んだ。

吸血鬼たちの前進が止まった。自動小銃や散弾銃よりもショックだったらしい。

でんでんと前へ出て、女は隊員たちに手を振った。

「お退まがり。危ないよ」

たじろいだのは隊員ばかりで、吸血鬼市民団は、血色の蛍光塗料を溜めた両眼を光らせ、再びにじり寄って来た。

「むう。——やる気だね」

でぶは身を屈かがめて、スニーカーの蓋またへ手をかけた。ダイヤル式の錠であった。

「ふふふ、見といで」

吸血鬼たちへ、不敵に笑いかけた表情が、変わった。

隊長の方を向いて、不機嫌そうに、

「ねえ——何番だったかしら？」

「囲まれて出て来ないぞ！」

ヘリの窓から外を覗きながら、梶原は叫んだ。

「何とかせい！ 何とか」

はっと気づいて、右手をポケットに入れた。残りの隊員へ、

「ドアを開けたまえ。わしも行くぞ」

「いけません、区長。危険です。外には奴らがいます。じきに、戸塚署から応援が来ます！」

「それまで待てるか。おい、ビデオカメラ、ちゃんと撮っとるか？」

「大丈夫です！」

着陸時に頭を打ち、ふらふらの状態で、カメラマ

ンが保証した。

「区長自らご出陣ですか。こりゃ、受けますよ！」

「けっして他を映すなよ！ あけい！」

梶原の脳裡から米国防総省の一件も消えていた。

目前の榮譽と快樂の追求こそ、彼をもっとも優秀な能吏とする性向であった。

ドアが開いた。

青白い——牙を剝いた顔がスペースいっぱいに広がった。

「退がれ！」

梶原にとっては一世代の見せ場だったろう。

まさしく、下知する猛獣使いのひと言に触れた餓狼のごとく、血に飢えた市民たちは後退したのである。

区長が高々とかざした、腐りかけの白桃を見て。ヘリを降りるとき、梶原はためらった。

取り囲む妖怪たちは、ひたすら彼を狙っていた。

一メートル足らずに迫った脅威など、初めての経験

であった。

「えい、糞」

区長にあるまじき呪詛をつぶやき、彼は地面へ降りた。

吸血鬼たちが退がるのを見て、カメラマンと警備員もつづいた。

「撮ったかね!？」

肩越しに振り向いて訊いた。

「撮りました!」

「よし、戻るぞ!」

「えっ!？」

「先に乗って、私を引っ張り上げる! いま、救助に移る」

顔を見合わせたカメラマンと護衛がヘリへ戻ったのを確めてから、梶原は周囲の妖鬼を一瞥し、にっくと笑った。

上体がのめった。右手を大きく振ったとき、カメラマンには梶原の行動が読み取れた。頭に叩き込ま

れた区長の経歴を彼は憶い出した。

梶原義丈——区立新宿高校、一九××年度甲子園出場投手。

振りかぶった手に、真夏の陽が当たった。

スタンドを埋めた応援団の絶叫。

梶原は思いきり白球を投擲しようとした。

その刹那——大地が揺れた。

全身が、通りの人垣を見た。

輪は大きく広がっていた。その中央から、黒い塊が屹立していく。大地から生まれた巨木のように。

いや、それは巨木であった。木の幹であった。

アスファルトに蜘蛛の巣状の亀裂が走っていく。

その間で蠢きくねり、押し広げていくのは太い根であった。

梶原もカメラマンも、吸血鬼たちでさえ茫然と見つめる虚空に、黒い線が幾筋も伸びていく。その下に点々と膨らむ光球のような塊は——

「えい!」

